



香田賢晋 代議員
(博多車掌区)

組織拡大以前の問題として、青年部とベテラン組合員との温度差が大きい。私は現在、教宣活動に力を入れており、「若い力」と「国労はかた」を手がけているが、なんと同じ組合の先輩方から、「主張が偏っている」「以前と比べて駄作が多い」といった非難を浴びることが少なくない。「会社の考えが絶対ではありません。ひとりの人間として誇りを持って働くために、一緒に考えましょう」という価値観のもと執筆してただけあって、こうした無理解な反応が返ってくるのは残念でならない。もちろん、私の考えが絶対的に正しいとは思っていないし、人それぞれ大事にしているものが違うことも理解している。それゆえ、多くの組合員の「思い」を記事にして紹介したいから、地区本部にメールを送っていただくようここ数年呼びかけているが、誰も送ってこない。それにもかかわらず、こちらへの駄目出しは遠慮なくするというのは何か違うのではないか。伝統やノスタルジーを否定するつもりはないが、いずれは組合員個人の在り方が問われてくる。他人に干渉する余力があるのなら、自分の得意分野を理解し、それを活かした個人での取り組みに力を入れて欲しい。私たち青年部は、引き続き今のスタンスで活動していくのでご理解いただきたい。

青年のひとりごと

毎月、自分の考えを記事にして書いていると、しばしば「先輩方」から、「そんな独りよがりの主張ばかりしていると、いずれ孤立するよ。君のことが本当に心配。」といった「ダメ出し」を受けることがあります。自分の意見を持つことの重要性がこれほど強調される時代にありながら、誠に心外です。そもそも、公に「自己表現」をするための前提として、文献等に目を通し他者の知恵を借りる、そして、周囲の方々からの「了承」を得るといったことは、これまで欠かしたことがないため、定義上、「独りよがり」であるはずもなく、論理不成立というもの。もっとも、このように「孤立」の不安を煽る人間というのは、ある大きな事を履き違えています。それは、人間関係とは「固定的」なものではなく、「流動的」なものであるということ。なぜなら、私たち人間は、一人一人が「自分自身はどう生きるか」という実存的な問題を抱えており、当然、その結論は十人十色。歳を重ねる毎に個性が強まり、周囲との価値観に違いが生じるのは、ある意味当たり前だからです。そのため、仮にこれまで親しかった人と「疎遠」になったとしても、同じような価値観で生きる人間は社会のどこかに必ず存在するため、(運もあります)そこから新たな人間関係が構築されるものです。よって、大局的な視点で見た場合、人が「孤立」することなど構造的にあり得ない話で、こうした「孤立」という言葉を使って、他人をこき下ろす人間というのは、「今の人間関係が壊れたら生きていけない」という「不安」に支配された自分の「弱さ」を相手に「投影」しているに過ぎません。このことから、「孤立」というのは、自分自身と向き合うことを放棄し「変化」に弱い「ガラパゴス的集団」に埋没した者が、そこに馴染まない人間を糾弾し「心の安定」を得るための実体のいい言葉と言えます。少なくとも、自分の頭で考えて主張をすることと、それを後出しジャンケンのように否定することは、求められる「レベル」が全く違うということくらいは知っておくべきです。

○当面する行動

- 2月17日(金) 14:30~/筑紫平和センター クローバープラザ
- 2月20日(月) 18:30~/解放共闘人権学習会 JR博多シティ10階会議室
- 2月21日(火) 18:30~/労金博多支店推進活動 Tジョイ博多